

## 猫のいる風景

全編100枚書き下ろし予定

400字詰原稿用紙 全編100枚書き下ろし  
平成十七年十月十一日脱稿

## 第一話 女衞の竜吉

たなか 踏基

猫じやらし前世の玉と遊びけり・踏基

本所深川の女衞せげんの竜吉たつきちの趣味は、釣りであった。深川の地名由来は、深い川があったからでなく、実は深川八郎右衛門という人物が住んでいたことによるといふ。竜吉が生きた時代は、幕末期から明治新政府が設立された頃である。文字通り日本の激動期であった。

竜吉は女も釣ったが、魚も釣ったのである。魚を捕獲する手段としての釣りは、日本の石器時代遺跡からも骨角器の釣針が見付っているが、生きるための狩猟であって趣味ではない。庶民の釣が趣味として定着したのは、幕末から明治に掛けてと言われている。

長竿を振って身体を鍛錬し、水面を覗みながら魚との駆け引きで、鋭気を養う武士の釣りと異なり、町人の釣りは最初、猫を飼うこと同様に、裕福な大店の旦那衆の間で始まっている。こうして、道具や場所に凝り江戸後期には、武士とは異なる町人釣文化が芽生えたようである。

女衞の竜吉の釣りの趣味の場合は、そうした凝り性の旦那衆と共に風情を楽しむというよりは、川縁で竿を垂れながら、客種と時間を掛け

て親交を結び、金蔓の鴨を見付けるための、半ば趣味と稼業を兼ねてのことであった。

大店のご隠居さんならいざ知れず、江戸前期、長屋の職人の身分の大工や左官が、暇とお金を持って余して釣に興ずるといふ習慣は、一般庶民の間では殆ど無かったからである。

と言つのも、女衞の竜吉の裏稼業は実は俗にいう阿呆鴉あほうからすであった。女郎屋の店もなく、抱える公娼私娼すらなく、単独で要請に応じて女を旦那衆に取持ち、御上の目を盗んでの稼業、今でいう美人局つつもとたせやポン引きであろうか。本所深川は、猪牙舟ちよきがねを仕立てて、一見素人の身形の女を船に乗せ、鴨の客筋に送り込むには、絶好の場所であった。川岸には、その舞台となる水茶屋が随所にあつた。

猪牙舟とは、江戸後期の明暦年間に考えだされた小舟の名称である。単に猪牙とも呼ぶだが、特徴は細長く船首が尖っていたので、猪の牙に似ているところからこの名が出たともいわれている。酒手はずんで船頭一人に、竜吉と女二人で客になって水茶屋に向う。

お客の旦那衆は、連絡済みの水茶屋で、今や遅しと女を待っている。勿論茶屋の仲居にも小銭を渡すのを欠かさなかった。これが、

竜吉のお決まりのやり方であった。

いなせな船頭達はその速さを競った。深川は、川や堀が縦横に走っていたので、移動にはこの猪牙舟の方が、連れを駕籠に乗せるより早くて便利な庶民の足だったからだ。

この稼業は、女と客のどちらにも傷が付かぬよう、秘密厳守の口先の交渉術が、竜吉の一番の売りであった。他のやくざ稼業同様、肌を売る女達の、秘密を全て握っていたので、人に言えない女の弱みや、客筋の行為を利用して脅しや強請ゆすりを仕掛ける所業は、竜吉は自分の信用に掛けて殆ど一切しなかった。

やるうと思えば、そうした行為で賭場の手慰み泡銭を稼げたのであるが、口の堅さが竜吉の信条であった。こうした裏の売春行為は、御上の眼を潜る稼業であったので、時には危ない橋を渡ることもあつたからである。

恨みを買っては、稼業がやり難くなる。仲を取り持つ口の堅い竜吉の存在は、女にとつても、客筋の旦那衆にも重宝であった。

頼まれれば、竜吉は旦那の走り使いや女の艶文代筆、女の炊事洗濯、留守番や子守すら、今でいう便利屋の駄賃稼ぎのような仕事も嫌な顔せず即座に引き受けたのである。

誰も竜吉の素性を知らなかったが、元は松本藩の下級武士の倅で、本名は江藤一馬であった。読み書きが出来たのは、そうした背景がある。憧れて江戸に出てから、やくざ稼業に手を染め成行きで竜吉を名乗った。

男つぷりの良い竜吉に惚れ、飯炊きや洗濯

をしてくれる、押掛け女房志願もいたが、決めた女を抱かない主義であった。

旦那衆にとつて多少値ははつても、素人女という触れ込みは、花魁おいらんを抱くよりも、こたえられない性的刺激を与えたようだ。

旦那衆は、自分の古女房の身体に飽きたので、その目を盗んで「陸釣り」も大変得意であったからだ。この稼業もこれで、結構難しい稼業だと竜吉は思っていた。

竜吉の釣り趣味は、言わばお客の旦那衆を見つける営業上の手段であった。

大店の旦那と並んで、中之橋近傍で糸を垂れていると、江戸商人気質のつれづれが、旦那の口から窺えた。「商は笑なり」「春夏冬、二升五合」「果報は練って待て」「人の行く裏に道あり花の山」「無欲千両」釣果の上がらぬ時に、自らに言聞かせる旦那衆の呟きを面白く勉むことができた。

時には、深川の牡丹町のおひると呼ばれた岡場所に引つ掛けて、釣り場に態々やってきては、川柳仕立てで「あひるでも追えと黒鴨式朱もらい」と竜吉に駄賃を渡し、昨夜買った女と同タイプの素人女を所望したり、二度同じ女を希望する旦那もいた。

でも竜吉の信条は、そうした要求を断るのが常であった。だから、水茶屋での一見出逢いの原則は、困った時にだけ亭主に内緒で春をひさぐ私娼予備軍の女房や、玉志願の素人娘の信用を大いに克ち得ていた。

女術の竜吉の名は、こうして深川界隈の

長屋の女房、小料理屋の小女や仲居、大店の女中達、水茶屋や出逢旅籠の女将に至るまでが安心して、竜吉に相談を持ち掛けた。無論、素人女のみならず、幕府非公認の岡場所おひるの私娼も混じっていた。

余談であるがボン引きの語源は、ぼんやりしている者を引つ張って騙す、つまり「ぼん引き」が訛つたという説と、盆の上の博打の「盆引き」説の二説ある。

更に加えるなら、大阪や京都の粹に対抗して、江戸の元禄文化は男女ともに意気であった。当時露あつらな交合の絵図も人気で、念のやり場が行き着くところまで滞留し、洗練され、交わりの歡喜と悲哀があつたらんと噂と共に語られたのである。

旦那衆は、一様に意気を競ってバレ句も得意であった。バレ句とは艶句とも言つ。

例えば、

絵図なれば覗き放題し放題

春の風煽るだけ煽つて知らぬ顔

湯上りの何か欲しき立姿

させもせずしもせず二人名を残し

鼻息で知れる隣の仲直り

さて竜吉の本業、女術のことである。

諸国を巡り歩き、女を遊女屋に売り飛ばす女術は、蔑称で「玉出し屋」とも呼ばれ、いわゆるあこぎな口入稼業であるが、元来

女術の術とは売る意である。

脅しや強請は当り前、悪人腹気質が女術稼業には時に必要であった。口入屋の女将達も異口同音に、抽ぬきんでて美しい私娼のお甲と、所帯を持つてからの竜吉の、あの時の変貌ぶりに吃驚していた位である。

と言うのも、旅に暮らし物色した女を狩り込んで、冷徹に売り飛ばす女術としての凄腕を女将達は皆知っていたからである。

「女術の竜」の手に掛かり、岡場所や廓の泥水に沈み、修羅の業から抜けられない女を何人も観てきたからである。

女術と言う言葉は、明治から昭和初期に掛けても半ば公然と存在していた。

国内女性はもとより東南アジアの女性を、日本の娼婦館に斡旋する商売が成立していたからである。当時の唐猫も、こうして半島の売られた女に抱かれて日本にやってきた。隆盛を極めた、こうした女子の貿易稼業や斡旋業は、公娼制度のあつた江戸時代のみならず昭和期に至るまで続いている。

大正八年(一九一九年)六月の廢娼制度の誕生で、一時的な打撃を受けたが、なおも潜伏し続けて、昭和二十一年二月のGHQ指令の公娼制度の名目上の廃止を経て、昭和三十一年五月の売春防止法の成立、昭和六十年二月の風俗営業等取締法(通称風営法)の施行等々に至るまで存続したのである。

いや、通常の賢婦人方に言わせれば、唾

棄すべきと評するであろうが、女術商売は平成の御世になつても「スカウト」と名前を代え、歌舞伎町や渋谷、他全国各地の魅惑の性風俗街に今なお存続している。

この世に女と男が存在する限り、洋の東西を問わず、世界各地でこうした商売は絶えることも無く延々と存続し続けるであろう。

女術・阿呆鴉稼業、また釣趣味どれをとってみても共通して言えることは、容貌は一見鼻筋が通つて短気そうに見える竜吉だが、実は非常に忍耐強く、特に口説き上手で、生来女に対しては頗るまめで、狙つた獲物を逃がさない執拗な性格を有していたからである。

元来女術・阿呆鴉稼業は、あくどさがなくては成立たない生業であつたが、竜吉のような男が、口入業界で人気があつたのは一に、この女好きの気質にあつたようである。

竜吉は猫をとても可愛がつた。

竜吉の猫好きは、界隈の女達にも良く知られていた。飼つていたというより、自然に居ついてしまったというのが正しいかもしれない。人にはどうやら猫から好かれる気質と、そうでない気質があるようで、猫も本能的に竜吉の本性を見極めていたのかもしれない。

竜吉は時折、自分の前世は、猫だつたと思つた時があつた。猫の気持ち不思議な位良く判るのである。魚釣が得意なのは、前世の猫の狩の習性の名残だとすら思つのである。

慕い寄ってくる猫との関係は、主従という

より、同族のような感じすらするのである。

女術稼業で、狩つた女を突然苛めなくなる衝動は、捕獲した鼠を、尖つた前足の爪でなぶる猫の心境と同じだつたに違いない。

稼業の一環で、よんどころ無く小猫を懐に抱き、女から一時預かりした時もそつだつた。

猫の体温を懐に感じて、肌に直接触れる猫毛の感触が、仲間と一緒にいる堪らない快楽を呼ぶのである。懐から顔を出して外界を窺う猫の仕草は、まるで小女がはにかむ姿に似て自分が母猫にでも成つたような心境になる。猫と遊ぶのは、女を扱つると同じであつた。

例えば、竿の先に糸を付け、垂らした糸の先に鶏の羽を付ける。釣りの要領で、この道具で猫を踊らせるのである。

人には判らない匂いと羽の擦れる音に猫が飛びつくや鼻先で、竿をぐいと引くのである。

そうすると猫は後ろ足で立ち上がり、小鳥を狙うかのように飛翔して獲物を狙う。羽を前足で上手く捕らえた時は、首を思い切り抱きしめて狩の本能を何度も褒めてやる。

当時旦那衆に人気だつた、長尾の高価な舶来の唐猫も預かつた。他に魚釣り現場に現われた、吊つた魚を狙つた猫との腐れ縁もあつたから、竜吉の深川の裏棚には、常時猫が数匹、十匹ほど居候していたのである。

江戸時代に、交配で短尾の和猫が生まれたのであるが、庶民の間で当時長尾の唐猫は化けると嫌われたようである。竜吉の場合長尾、

短尾の猫のどちらにも頓着しなかつた。

ちなみに猫と女性との類似点は、不思議なことに昔から性風俗業界で万国共通である。

猫の腹の柔らかい体毛と、女性のこんもり盛上つた丸みのある乳房と、股間の恥骨の陰毛は実に似ている。猫の体毛と女性の陰毛は、実にバリエーションに富んでいる。猫は殆ど有り得ないが、稀に女性には無毛があり長毛短毛、直毛、縮毛、渦毛と千差万別である。

もちろん俗語であるが、廓言葉で芸妓娼婦のことを猫と言つたし、英語では、女性の陰部を、Pussy/Pussy-catと称した。米語のスラング、Cat-houseは、文字どおり日本の娼婦宿といった按配である。

あの女は、私娼のお甲と言つた。

竜吉が、あの時以来、「女術の竜」から「仏の竜」に変わったのである。

竜吉の馴染みの水茶屋の、お甲は抽んで美しく、美貌は男どものみならず、茶屋の女将の肉眼を引いた。お甲の美貌は、時折靄が掛かつたようで漠然として、一重瞼を瞬かせ焦点の定まらぬ虚ろな目をする時があつた。

お甲もまた、自分の素性を他人に決して明かさなかつた。源氏名お甲の本名は、林八重である。信州木曾代官所の没落士族の娘で、特産白木のミネバリのお六櫛を肌身離さず所持していた。お六櫛の発生は、享保の頃で、木曾特産として江戸でも評判であつた。

竜吉はお甲を一目見た時から、通い妾に最適と断じていたのであるが、まさか、あの時、懇願されたとはいえ、鉄砲州の洋館に通う洋妾に、推挙しようとは思いませんでした。

お甲は、何時も白い猫を抱いていた。

隅田川の佃大橋を渡れば、直ぐに鉄砲州(今の明石町)である。

地名由来は、埋立地の地形が鉄砲のような形状であったとか、幕府が鉄砲の試射をやった場所との説もある。幕末の黒船騒ぎで、急遽大砲を置く台場が設けられた場所である。築地本願寺は近くである。

ここに幕末の築地外国人居留地があった。安政五年(一八五八年)に日米修好通商条約の締結により、幕府は貿易のための市場を設ける必要に迫られた。

先ず安政六年(一八五九年)横濱が開港し、交易のための市が出来た。異人が外に出ないように、堀を巡らし関所を設けた。これが「関内」の地名として今も残っている。

築地開市は正式には、十年後の明治元年(一八六八年)とされているが、準備は幕末から既に開始され、横濱に少し遅れて始まっていた。この居留地は、明治三十二年(一九〇〇年)まで続いてやがて廃止された。

横濱に港崎遊廓(今の横濱公園)があったように、築地にも新島原遊廓があった。

島原は京都の有名な遊廓であるが、これに對抗しての命名だったという。横濱「関内」

の居留地は、異国人の商社が次々と上陸しては根を降ろし、港の発展とともに隆盛であったが、築地居留地は余り発展しなかった。異国人にとっても便利な横濱に比べ、新興の築地に移住する気にならなかったようである。女術の竜吉としても、深川・築地の発展を願って、今後の顧客開拓先、新島原遊廓にも当然足重く出入りしたのであるが・・・。

最所その話は、隅田川端の船宿の主人、谷村伝兵衛からだだった。谷村伝兵衛は、三代続いた船宿の主人で、屋形船を三艘有するいわば深川界隈きつての老舗であった。「吹けよ川風 揚がれやすだれ 中の小唄の主みたや」

江戸市民は隅田川に好んで出掛けた。

武士も庶民も、隅田川で涼をとるには絶好だった。屋形船の舟遊びもできるし、花火も楽しめた。当時の屋形船は、猪牙舟と異なり意気でお洒落な豪華な遊びであった。

猪牙舟が水上タクシーなら、屋形船は豪華納涼船である。慶長年間(一五九六〜一六一五年)に、時の評定所からの要請で、吉原の遊女が召しだされた。炎天下では遊女達が可哀想と言つことと簾を掛けたのが、屋形船の始まりである。評定所とは、寺社奉行、町奉行や老中の集まる場所であったから、今の内閣と裁判所を合せたような役所であった。当時の吉原の遊女は、読み書きは無論のこと高貴で芸に秀でた高

級コールガールのような存在だったのである。

伝兵衛は、遊女を侍らせ船客となった馴染みの幕府要人から依頼される機会があったに違ひなく、竜吉にこう切り出したのである。

「深川・築地発展のためにぜひ、竜吉にぜひ人肌脱いで欲しいことがある・・・」  
「はて何でやんしょう？わっして旦那さんのお役に立てることでしょうか？」

「竜吉さんしか頼める人はいないのだ！」  
谷村伝兵衛のたつての頼みを聞いてみて、流石の竜吉も絶句したのである。

鉄砲州に、何でもやがて毛唐の新規寄場ができるとかで、洋館や教会等の施設を幕府自ら造るのだと聞いたからである。

その滞する毛唐対策の洋妾を探せと言うのが、伝兵衛の依頼であった。しかも、単なる「洋妾(らしやめん)」でなく、相手の間夫は耶穌の坊主であるというから、竜吉の二重の驚きであった。

綿羊の異名「らしやめん」語源は、禁欲を強いられた水夫や修道僧が綿羊を犯したと言う俗説からきていた。

日本にも、女色狂いの生臭坊主は結構いるが、毛唐にもやはりいるのか？・・・と。幕府要人が何故そこまでしなくてはならないのか、その感情は驚きというより始め怒りに近かった。でも竜吉は、とっさに水

茶屋のお甲の顔を思い浮かべていた。

伝兵衛の懇願で、お甲を口説いて洋妾を承

服させたのである。お甲は別に洋妾を左程嫌がりもしなかった。後で考えてみると不思議である。通い妾の候補は、女術・阿呆鴉稼業の中で幾らでも居たはずなのに、迷うこともなくお甲を推挙したことがである。まるで同族の猫の相棒を選ぶかのようにである。

最も故国に妻子を残し、単身日本に渡ってきた、異国の耶蘇の坊主と言えどもやはり、男は男であるのだと実感していた。不自然な獣姦で性衝動を満たすより、生身の日本人の女が良いに決まっていると同情もした。

幕府は、横濱居留地、港崎遊廓の成功に味をしめ、江戸の築地居留地でも新島原遊廓を策したものの、築地は総じて不人気で、当てにした商社員や公使館の要人は来ず、やってきたのは、耶蘇の布教の宣教師だったのである。

明治以後、ここ明石町には、蘭学塾やキリスト教系私塾や教会、診療所ができた。

日本初の英和辞書を編纂したJ.C.ヘボン塾も、横濱から築地に移転してきている。

やがてこの地は慶應義塾、立教大学、明治学院大学、青山学院、聖路加病院等のキリスト教系列の学校の発祥地となっている。

谷村伝兵衛は、絶対に他言無用と口止めした上で、謝礼に竜吉に十両弾んだ。伝兵衛は、お甲の身の回りの世話係にとお米を付けた。築地居留地に横濱の会から派遣されてきた、赤毛の宣教師のルドルフ・ロングがお甲を大変気に入って、愛したのは言うまでもない。

鈴付きの白猫の首輪の内側に、和紙の文を託す一計を案じたのは竜吉であった。

お甲は何処か捨て鉢な雰囲気であったが、私娼にしては教養もあり、和歌もたしなんだ。

吉原の遊女のように、字が読めて書けたからである。女術の竜吉としてでなく、江藤一馬として、読み書きできるお甲に興味を抱いたのも無理もなかった。竜吉とお甲の連絡係を、お甲の白い愛猫が役目を担っていた。

猫は本来定宿を持たない動物で、深川の竜吉の家、洋館の築地のお甲の所に至る距離を、誰にも気取られずに難なく旅をした。

縄張り内を、放浪漂浪しながら狩をする本能と帰巢習性を巧みに利用していたのも、猫好きの竜吉ならではのことであった。

谷村伝兵衛は、そんな連絡方法が二人の間に密かにあるとは、ついぞ知らなかった。

お甲の月々のお手当ては、伝兵衛が全て受取って中を当然のごとく、搾取してお甲に渡されていた。その搾取に気付いたが、竜吉は別に怒りもしなかった。

猫の首輪の文を媒介にした、お甲と竜吉二人の関係は始め群れることを嫌う「我関せず」の絆であった。群れて暮す人々は「寂しい」感情を秘めているからこそ群れて生活する。

その癖群れの中で、自分の立場を主張しては、優越感や恪気を起している。そう言う意味で、群れ意識の薄い二人の気性は猫に似ていた。互いに猫文を遣り取りする、二人の縁は接

近して、共通種族の存在を自覚させた。

猫が頬や目の周りの匂腺から、縄張りを主張して「匂い付け」の習性を持つのと同様であった。和紙の文が「匂い付け」の役目を果たした。異種からは気配は察知できないが、同種では気配を察知し近づいた。竜吉は、お甲も前世は猫だったと思うようになっていた。

達吉は、女術の用務で中山道を旅した時、お甲のために、土産にお六櫛を一つ買い求めた。竜吉が時めいて、こんな優しい気持ちになつたのは、松本出奔以来初めてであった。

決して、竜吉はお甲が木曾の生まれと知っていた訳ではないのである。

達吉の好意を、伝兵衛を通じて受けた時、お甲は飛び上ると、土産のお六櫛を取り持つ縁を感じて、その櫛を抱きしめて喜んだ。自分の木曾生まれの素性、いや自分の前世さえ竜吉が知っているのではと思つた位である。

何故なら、お六櫛の素材、白いミネバリの木には、猫科の動物だけが感じる独特の匂い、またたび木天蓼に似た性質があつたからである。

またたびは、猫はもちろん人の薬草としても効能がある。落葉蔓植物で、初夏に葉の先が白くなり、若枝は蔓状に延びる。花は白梅のようで、八、九月に黄緑色の実を付ける。

その夜お甲は、本名林八重に立ち戻り、まるで夜行性の木曾の山猫さながらに、喉をゴロゴロ鳴らし、憑物に憑かれたかのように大きく眼を見開き、その瞳孔で闇を見据えると、

獲物の存在、竜吉を確認するかのように恍惚の表情を浮かべていた。抱いた白猫も、共鳴の「喉鳴らし」をしたのである。

築地居留地の宣教師ルドルフ・ロングは、その夜の奇妙なお甲に黒猫を連想し、気味悪がって、傍に寄り付かなくなったのである。

猫を忌み嫌う例は世界各国にある。

日本の猫股とは、耳が裂け尾が二つに割れた猫で別名、化け猫のことである。神通力で空を飛び、天変地異を引き出すという。

「赤猫が舐める」とば、放火のことをさす。

中国故事の十二支も、同じ猫科の寅は出てくるが猫は出てこない。西洋の中世のカトリック教徒は、猫は邪悪な悪魔として排斥した。特に黒猫は、魔女狩と相まって忌み嫌われるだけでなく、虐殺されたのである。これは奇妙な猫の乱交習性が、受胎に伴う淫乱な女との類似性や性風俗と関係があった、という説を聞いたことがある。

これが竜吉とお甲、いや信州生まれで、互いに輪廻転生で前世猫だった者同士、江藤一馬と林八重の魂の出会い、人に生まれ代わったきたことを確認し合った瞬間で、不可思議な縁の始まりであったのである。

やがてお甲は、ルドルフ・ロングの洋館から、お暇を出されると、谷村伝兵衛を通じて、竜吉に下げ渡された。

伝兵衛には、何故あんなにルドルフ・ロングに可愛がられたお甲が、洋館からお暇をだされたのか、判らずじまいであった。

伝兵衛もまた、お甲の奇妙な魔力に惑う

一人であったのかもしれない。

竜吉とお甲は、その後所帯を持った。お甲は濃く紅をさし白猫を抱き、花嫁衣裳の友禅染の白い元禄小袖を着て嫁いで来た。

竜吉は、この時から「仏の竜」になった。

夫婦仲は、必ずしも良好という訳には行かなかった。女房のお甲は常に「暗い場所

で光る眼」をして、昔私娼の気質丸出しで、野生の猫が家畜になり得ないと同様、竜吉一人に、満足できなかったからである。

どうやら、お甲の前世の猫力が遙るかに勝っていたようであるが、多淫が祟ってか二人の間に子は出来なかった。竜吉は、お甲に精気を吸い取られた如くで、文字どうり「仏の竜」に成下り、全く昔の「女衞の竜」の面影すら見られなかったという。

両国に無縁寺・回向院えこういんがある。

寺は竜吉の住む深川から左程遠くない場所にあった。明暦の大火の「振袖火事」により、江戸市中の六割以上が焦土と化し、十万人以上の市民が亡くなっている。当時將軍家綱が、無縁仏を供養するため明暦三年(一六五七年)「有縁・無縁を問わず、人・動物に関らず、生あるもの全てに仏の慈悲を説く」として建立した浄土宗の寺である。

ここに「猫塚」があった。

いわれは以下である。

・両替商の時田喜三郎という男が一匹の猫を飼っていました。出入りの魚屋は、この猫に何時も魚をやり可愛がっていました

た。ある日、魚屋は病を患い貯えも無くなり困り果ててしまいました。

そんな折、何者かが二両ものお金を置いていきました。そのお陰で病も治り、魚屋は喜三郎の家に魚を売りに行つたが、ふと気が付くと猫がいなのです。喜三郎に聞くと、二両もの金が盗まれたことがあり、注意していると猫がまた二両持ち出したことが発覚したという。二度目は捕らえたが、最初の二両を盗んだのもこの猫ということ

で殺してしまったという。魚屋は、猫が自分のために盗んだことを涙ながらに語つたという。猫が魚屋に恩返しをしたかったのだと知つた喜三郎は、二両を魚屋に渡し、猫の志を継いだそう。魚屋は猫のために回向院に塚を建てて供養したと伝えられています。

世には、様々な猫の行動があると知れる。

塚は、風化し表面の文字は読めないけれど、二人の猫人間、竜吉もお甲も死後は、この無縁寺・回向院に埋葬されたという。

この猫塚の隣に、江戸の義賊鼠小僧の墓があると言つたら、この取り合わせの妙に、本所深川の人々は感じ入つたのである。

第一話 了

猫の恋回向ねずみと精をだし・・・踏基

### 参考文献

『夜狐・暗黒時代小説集』池波正太郎著 立風書房  
『幸せになる猫との暮らし』小暮規夫編 幻冬舎文庫